九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

〈愛の言語論〉序説

辻野, 裕紀
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授

https://doi.org/10.15017/6787721

出版情報：言語科学. 58, pp.21-33, 2023-03-07. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

〈愛の言語論〉序説

辻野 裕紀(つじの・ゆうき)

(…)
幸せとは
幸せとは
しあわせとは

おそらくは愛と呼んでいるもの
寂しさといとしさの違いはわたしはもうよくわからない

本当のさひ(ママ)はひ
わからないから私はひとつずつ集めてきた
しあわせについて
いつまでも書き終わらないことを知っている

——安達茉莉子「ほんたうのさひ(ママ)はひとは」[1]

1. はじめに

夙にエドワード・サピアは, "The word is merely a form."(語はカタチに過ぎない)と道破した. 語に限らず, 言語とは「カタチ」だと言ってよいだろう. これは, 古色蒼然たる言語観のようにも見えるが, 言語学の枢要は, 音形と語形をめぐる論, つまり, 音韻論と形態論に存するという禁欲的な思想を, 筆者も支持する立場をとってきた[2]. 実際に, カタチ主義的な言語研究は, 未だ湮没(いんぼつ)していないように思料される.

一方で, そうしたカタチのみを研究の俎上に載せる言語学からは零れ落ちるものがあまたある. 例えば, 〈意味〉である. 意味はカタチを成さない, 目視不能なものである. ゆえに, 例えば, レナード・ブルームフィールドを嚆矢とするアメリカ構造主義言語学などにおいては, 意味は相対的に忽略されてきた. 無論, 意味論や語用論は, その根幹に〈脱文脈化/文脈化〉という差異が横たわっているにせよ, いずれも意味に光を当てた領野であり, 意味という渺漠(びょうばく)たる海原を前に, 浩瀚にして偉大なる業績を産出してきたのも事実である. しかし, 意味傾斜の言語学の底を支えるのはやはりカタチ主義の言語学であって, それ抜きに意味を語るのは禁忌である. さもなくば, 言語研究はすぐさま研究者の思弁的な恣意へと堕してしまうだろう.

---

[1] Twililight 朗読会「世界に放りこまれた」(安達茉莉子 feat. 大和田慧, 2022 年 8 月 14 日)での配布資料より引用. なお, その 3 か月後に発売された安達茉莉子(2022)収録の「ほんたうのさいはひとは」は改変され, 引用部分は含まれていない.

[2] 『形と形が出合うとき』という象徴的なタイトルの書籍も一昨年に刊行した.

さて，本稿のタイトルは「〈愛の言語論〉序説」である．愛もまた目視不能な情念である．カタチ主義の言語学を底流に据えつつも，いささかロマン主義的でナイーブにすぎる視座からの補助線によって，従前の言語学や言語論がゆるがせにしてきた問題群を活現させるところに，本稿の目途はある[3]．

2. 母語論

まず，母語に〈愛〉というものを接ぎ木してみよう．例えば，「言語習得にとって，愛が必要だ」——かかる命題は，科学を扮偽した言語学において，言下に撥無されるであろう．しかし，〈愛〉という視点を欠く言語教育＝言語学習は，羸痩したものにならざるを得ない．

筆者が生まれたとき，日本語は既に十全なる形で存在していた．自らの意志で日本語を母語として選んだわけでは決してない．この点で，母語は〈選択不能な恣意性〉を帯びている．ややハイデガー風に言えば，気づいたときには，すべてに日本語が介在する世界に「被投」され，日本語話者として在った．では，なぜそうした事態が出来したのか．

それは，幼き日，普遍文法（チョムスキー）を先天的に蔵した我々に，両親をはじめ，親戚や近所の人，幼稚園の先生など，〈重要な他者〉(significant others)——この用語自体は社会心理学者のミードの自我形成論の概念だが——が日本語でたくさん話しかけてくれたからにほかならない．そこには，無償の愛が充溢し，初原の「声」がけざやかに聞こえてくるが如くである．そういった意味で，ことばは圧倒的に人間的な営みで，いつも母性的な愛を想起させるものである．ほとんどの人は既に弭忘しているが，誰もが愛に大切に包まれてきたから，日本語ができるようになった．愛なしにことばを習得した人など，原理的に存在し得ないのである．言うまでもなく，それは，日本語のみならず，韓国語＝朝鮮語やフランス語など，別の言語でも同断である．

言語は，人の来し方を鮮明に映し出し，知性や人間性も投影される．端的に言って，ことばはその背後に個人史が棲んでいる．管啓次郎(2005:6)は「私とは私がこれまでに耳をさらしたすべての音の集積にすぎないと，ぼくは思うようになった．私は私の訛りをもって，私の遍歴を証言し，世界の響きに合流する」と言う．イギリスの詩人アルフレッド・テニスンの「私とは今まで出会ったすべてのものの一部である」，スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットの「私とは私と私の環境である」，ユダヤ人哲学者マルティン・ブーバーの「すべて真の生とは出合いである」などの箴言と響き合う言明のようにも見える．そして，「耳をさらしたすべての音の集積」には，言語形成期に享受した，少なからぬ愛の断層が含まれているだろう．多孔的な言語基盤が，他者との交わりによって，次第に満たされていく．それは，他者の愛と，それに敏感に反応する，愛への正の走性——〈走愛性〉とでも呼べようか——なくしては決して成立しない．〈重要な他者〉たちの声にアフォードされつつ，目的意識的ではなく，脊髄反射的にレスポンスするような形で，いわば中動態的にことばを自動化していく．

田中克彦(1981:28)は次のように述べている：「子供はふつう，まず母親（ときには代りの乳母）の乳で育てられる．そのとき，乳房からの授乳が無言でおこなわれることは決してない．乳を吸わせる母親と乳を吸

---

[3] なお，本稿の内容の大半は，辻野裕紀(2010, 2016, 2017, 2020)などの論考，グカ・ハン×辻野裕紀(2022)などの対談で既に論じたものである点，ご海容願いたい．本稿は，〈愛〉をキーワードに，これらを再整理した上で，さらに刪潤したものである．

う子供とのあいだには，同時にことばを話しかける母親と聞く子供との関係が必ずあった．こどもが全身の力をつくして乳を吸いとると同時に，かならず耳にし全身にしみとおるものは，またこの母のことばであった．（改行）ことばを話すという，人間にとって基本的に重要なこの機能をはたすために，人間は専用の器官をそなえていないということ，それは本来，ただ食べるための器官を流用しているにすぎないという，気がついてみればじつにふしぎなこの事実も，授乳と話しかけという，誕生の原点にたちかえってみれば，ある程度はなっとくがいくように思われる」——これは炯眼だと判じてよい．言い換えれば，母語とは，嬰児（みどりご）の日の母からの肉体への愛の刻印である．

3. 越境作家たち

一般に，母語でない言語で文学作品を書く作家を〈越境作家〉と呼ぶ．

日本語を母語としつつ，フランス語で驚愕措く能わざる執筆活動を展開する作家の水林章＝Akira Mizubayashi は，自伝的著作 *Une langue venue d'ailleurs* の中で，《Le français est la langue dans laquelle j'ai décidé, un jour, de me plonger. J'ai *adhéré* à cette langue et elle m'a adopté... C'est une question d'amour. Je l'aime et elle m'aime… si j'ose dire…》(p.19)と述べている．要するに，自身とフランス語との関係は，〈愛の問題〉であるということである．

ベンガル語を「母」，英語を「継母」とし，イタリア語でも創作活動を行なうジュンパ・ラヒリ(2015:32)も，自身とイタリア語との熱い関係を恋愛のアナロジーで次の如く述べている：「人は誰かに恋をすると，永遠に生きたいと思う．自分の味わう感動や歓喜が長続きすることを切望する．イタリア語を読んでいるとき，わたしには同じような思いがわき起こる．わたしは死にたくない．死ぬことは言葉の発見の終わりを意味するわけだから．毎日覚えるべき新しい単語があるだろうから．このように，ほんとうの愛は永遠の象徴となり得るのだ」

苫野一徳(2019:57)は，哲学者の竹田青嗣の対談での発言を参看しながら，「好き」の本質を〈反復〉とする．好きな人には何度でも会いたいし，好きな映画は何度でも観たい．好きの程度は，反復への欲求に比例すると言えるのかもしれない．誰もが自身の恋愛や趣味などを顧瞻してみれば，〈反復〉という発想は，思い半ばに過ぎるであろう．ラヒリのイタリア語への態度は，〈反復の不可避性〉そのもののように見える．

「分からない」ということも，また愛を誘起する．内田樹(2005:102)は，「キミのことをもっと理解したい」というのは愛の始まりだが，「あなたって人が，よーくわかったわ」というのは別れのときのことばだと述べ，永井玲衣(2021:57)は，「わたしたちは，お互いの話をわからないからこそ聞くことができる．（中略） わからないからこそ，耳を傾けて，よく聞いて，しつこく考えることができる」と主張した．これらも言語への愛を考えるのに示唆を与えてくれる．心理学などで言うところの，いわゆる〈処理流暢性〉の低さは，我々を幾度も対象へと向かわせ，その過程で愛が醸成される．そのためには〈ネガティブ・ケイパビリティ〉的なマインドセットの具備が前提であることは，言を俟たない[4]．

---

[4] 教育論的な視座から照らすと，こうした分からなさに耐える力をいかに訓育するかというのも大きな課題である．マーク・フィッシャー(2018:66-67)の「まるでハンバーガーをほしがるような感じでニーチェを読もうとする学生もいる」という指摘はシンボリックである．SNS 時代にあって，即時回答，即時解決を日常とし，（対象関係論の術語を援用すれば）妄想分裂ポジション的な二元的思考を内面化して，〈躁鬱的ヘドニズム〉に浸りきった若者

水林章やジュンパ・ラヒリのテクストを参照すると，〈他者の言語〉を〈自身の言語〉として引き受けようとするとき——ここで重要なのは「学ぶ」とか「習得する」ではなく，「引き受ける」ということである．筆者は本来言語は「学ぶ」ものでも「習得する」ものでもなく，「引き受ける」ものだと考えている——そこに媒介するのは，やはりある種の愛だと断じてよい．一般の学習者が言語学習に向かうときも，その根柢には同様に当該言語への愛が伏流しているべきである．それが欠如した言語学習——単位のため，就職のため，飛颺(ひよう)のため，衒(てら)いのためなどといった自発的損得勘定に動機づけられた言語学習——は，鬆(す)の如く脆弱である．リーのラブスタイル類型論に擬(なぞら)えて言えば，プラグマ型やルダス型の学びには実りがない．

勿論，上記の愛というのは，子どもが母語を獲得するときとはまた種類の違う，異形の愛である．母語を獲得する際の愛が，「世界」に巻き込まれていくための，他者から与えられる受影的なものだとすれば，他者の言語を引き受ける際の愛とは，「世界」の複数性に自らを開いていくための意志的なものである．この違いはそれなりに大きい．しかし，母語であれ，非母語であれ，言語を内在化させていくことは，いずれも，愛と名づけうる感情を媒質としつつ，他者とのつながりへの欲望を充足させるための過程として機能しているという点で共通している．

いま「他者とのつながりへの欲望」と書いた．ジョルジュ・バタイユ(2004:24)は，この欲望を〈失われた連続性へのノスタルジー〉と称呼する．人間は「不連続な存在であって，理解しがたい出来事のなかで孤独に死んでゆく個体」である．それゆえに，他者とのつながりを欲望する．そして，その欲望を実現するもののひとつが〈人間的エロティシズム〉である．これもまた愛である．

さらに言えば，精神分析家のジャック・ラカンの図式では，〈享楽〉——〈快楽〉とは異なる概念であることに注意されたい——には〈ファルス的享楽〉と〈他者の享楽〉があるが，言語を学ぶ悦びとは，言語の襞に深く入りこみ，ありのままのことばをまるごと受け容れる享楽であって，それはまさに〈他者の享楽〉的な恍惚である．自他未分化の状態となるような，あるいは，他者との境界が消失してひとつに溶け合うような，あるいは，精神科医の神田橋條治が提唱する〈離魂融合〉のような，あるいは，自身が大きく変容して別人となるような体験こそが言語学習の醍醐味であって，それもやはりある種の愛というコンテクストの中に位置付けることができるであろう．

4. 〈愛〉を壊すもの

4.1. 母語話者信仰

前陳の通り，我々は母語を選ぶことができない．生まれてくるときに両親や性別を選べないのと同様に，子どもは母語を選ぶ権利を有していない．好悪を問わず，気づいたら，この言語を話していた．それが母語が本質的に有する〈選択不能な恣意性〉である．よしんばそれが他者から強いられた望まない言語であってもである．

しかし，恣意性を帯びているがゆえに，ありとあらゆる言語が我々の母語になりうる可能性が潜在的にはあったとも言える．ある言語を母語として長じたのはどこまでも偶然の産物である．フロイト的な比喩を使えば，母語は〈多形倒錯的〉だと言えるだろう．母語は移りゆく可塑的なものだからである．したがって，筆

たちにいかなる処方箋を提示していけばよいのかは，筆者も日々模索し続けている問題である．

者は，母語以外のすべての言語を〈潜在的母語〉と呼び，母語と等しく並置させている．これは筆者の言語観や言語教育観を支えるひとつの核となる思想であり，こうした構えを辻野裕紀(2010)は〈跨境的な生〉と呼んだ．母語を特権化したがる人は，〈関係性の蓄積〉によって，単なる偶然を必然と読み替えているに過ぎない．

翻って，母語ではない，他者の言語＝非母語は，原理的には自由に選ぶことが可能である．しかし，その言語を〈自己の言語〉として真に〈所有〉しようとするとき——例えば前述の〈越境作家〉と呼ばれる書き手たち[5]のように——〈母語話者信仰〉というアポリアが大きな桎梏となって立ち現れてくる．

〈母語話者信仰〉とは，「無批判に母語話者を「崇拝」し，当該言語に関わるあらゆる側面において，非母語話者をいかなる母語話者よりも下位に位置づけようとする思想」と，筆者は辻野裕紀(2010:42)で定義し，それを旗幟鮮明に難じた．その唾棄すべき思想が跳梁跋扈する限りにおいて，我々は他者の言語共同体の深部にまで入り込むことができないからである．〈他者の言語〉を〈自己の言語〉として引き受けようとするとき，それを阻碍するのが，この〈母語話者信仰〉である．言語を〈引き受ける〉ということは，換言すれば，言語を〈所有する〉ということでもあり，その〈所有権〉をめぐっては，リービ英雄(2001:47-48)が次のように述べている：

ぼくはおそらく，ほとんど無意識的に，近代の日本人からはコトバをめぐる所有権の強いクレームを感じて，その所有権から自分が常に外されようとしているということも，最初に東京へ渡来してきた昭和四十二年から，四半世紀以上にわたって感じつづけてきたのかもしれない．向う側から，つまり日本人として生まれた人たちから，日本語は「知っているのか，知らないのか」，「話せるのか，話せないのか」，「書けるのか，書けないのか」だけではなく，深層においては「所有しているのか，所有していないのか」の問題を絶えず突きつけられてきたような気がする．そしてこちらが知っている，話せる，書けるということを示せば示すほど，向う側から，最後に，絶対に分けてくれないコトバの「所有権」が問題にされだしたのである．日本人として生まれた人たちといくら体験や感性を共有しても，人種を共有しない者にとって，日本語にはあくまでも「借地権」という条件が付いていたのである．（引用終わり）

この〈ことばの所有権〉の問題は，鈴木孝夫(1975:165)が言う「日本語は外国人に分かるはずはないという偏見」と決して無関係ではないだろう．

日本語母語話者でありながら，ドイツ語でも卓絶した執筆活動をしている越境作家の多和田葉子(2003:9)は，「外国語で創作するうえで難しいのは，言葉そのものよりも，偏見と戦うこと」と喝破した．同書も挙げている例だが，例えば，日本語で芸術表現している人間に対して，「日本語がとてもお上手ですね」などと言うのは，ゴッホに向かって「ひまわりの描き方がお上手ですね」と言うのと同質で，非常に無礼で侮辱的な行為なわけだが，非母語話者に対しては，頭ごなしに上手だの下手だのと，無神経にも品騭しようとしてしまうことがある．しかし，例えば，素人が山中伸弥教授に「iPS 細胞のことお詳しいですね」など

[5] 日本語で表現活動をする越境作家としては，リービ英雄，デビット・ゾペティ，アーサー・ビナード，楊逸，シリン・ネザマフィ，李琴峰など，何人もの優れた書き手たちを挙げうる．

とは絶対に言わないだろう．ところが，相手が作家や言語学者など，その言語の専門家であっても，非母語話者であるという理由だけで「○○語がお上手ですね」と平然と褒め称してしまう．そういう母語話者たちの傲然さに我々は気づかねばなるまい．これは日本だけでなく，韓国においても同様である．例えば，日本語母語話者である筆者は，唯々フラットに母語話者と韓国語で対話がしたいだけなのに，非母語話者の筆者が口を開くやいなや，発話のコンテンツよりも筆者の韓国語能力の巧拙への関心が前景化し，上から目線の評価の洗礼を受けるはめになったことがこれまでに何度もあった．というよりも，初対面の韓国語母語話者であれば，ほぼ無条件にそのような状況になる．こうした経験を幾度となく繰り返していると，韓国への筆者の関心は払底し，韓国語への情熱も衰微する．かくして，筆者の「韓国語愛」はおもむろに冷めていく．如上の事例は，日本語社会や韓国語社会に伏流する根深い内閉性の顕現だと断じて過たないだろう．

韓国語の「우리말（我々のことば＝韓国語）」という表現も，「韓国語愛」を冷めさせる要因になりうる．この「ウリマル」ということばが筆者に対して向けられたとき，その「ウリ」という 1 人称複数代名詞が，inclusive we なのか exclusive we なのか．勿論，exclusive we にちがいないが，本当にそうだとすれば，もし筆者が「書き手」として韓国語の世界に参画しようとするとき，筆者は領域侵犯的な闖入者となってしまうだろう．リービ英雄(2001:14)のことばを改変引用すれば，「生まれた時から」韓国語を「共有しない」筆者は，「いくら努力しても一生「外」から眺めて，永久に「読み手」でありつづけることが運命づけられた存在」なわけである．固く閉ざされた門戸の前で「お前は誰だ」と常に誰何され，「日本人」だと分かるや，シオランのあまりにも有名なことば《On n'habite pas un pays, on habite une langue.》（『告白と呪詛』）のアナロジーで言えば，〈韓国語という名の家〉には永遠に居住することができない．

リービ英雄(2001:164)は，「ぼくは，日本語の歴史の一部になりたかった．英語でも書ける内容を日本語で書くのではなく，日本語を書きたい，日本語をつくりたい，と思った」とも綴っている．筆者自身は作家ではないし，そこまでの韓国語の力量も気宇壮大なる野心もない．「韓国人」になりたいと思ったこともない．そもそも韓国語を話すことは，「韓国人」になることとは全く異質な営みであるし，韓国語を話すからと言って，「韓国人」のように振る舞わなければならないとは思わない．もし韓国語の膂力を母語話者から認めてもらうために，振る舞いまで「韓国人」のように変形させることが要請されるのだとすれば，それはもはや同化の暴力と言ってよい．挙措まで「韓国人化」し，「이제 한국 사람이 다 됐네요.（もうすっかり韓国人になりましたね）」などと「韓国人」に言われて無邪気に浮かれている「日本人」の気持ちは，筆者には理解不能である．しかし，一介の韓国語研究者として，「韓国語お上手ですね」などと言われると，やはり矜持が傷つけられるし，「ウリマル」ということばを聞くと，強い疎外感を覚えるのは確乎たる事実である．

ところで，母語と雖も，我々はもともと所有していたものではなく，他者＝誰かから後天的に教えられたものである．この点においては，母語も非母語も本質的に何ひとつ変わるところがない．先天的に所有していたものでない以上，非母語話者の言語能力的位階を母語話者よりも劣位に位置づける根拠など絶無であり，一口に言って，母語も他者の言語である．細見和之(1999:12)の「そもそも生まれ落ちた者にとって，おしなべて言葉は他者の言葉である．その他者の言語を「習得」することによってしか，ぼくらは「自らを語る」ことができない」ということばは，かかる問題を熟思する上で，含蓄に富んでいる．さらに，野間秀樹(2018:370)の「私たちがことばの名で，あたかも無機的な対象のように扱っているもの，そうしたことばは，

自らのうちにあっては，常に他者から学んだものであり，また他者から学びつつあるものである．一定不変の自己同一性を誇るがごとくに扱われることば，そのことば自体が，〈他者のことば〉という契機を内包するものである」という一節も反芻したい．

カリブ海のグアドループ出身の作家であるマリーズ・コンデ(2001:40)は「作家にとっては，母語も植民地化の言語もありません．あらゆる言語は作家にとって外国語です．作家はそれら外国語を解体して，自分だけに固有の小さな音楽を鳴り響かせるのです」と言っている．また，あるシンポジウムで，リービ英雄は，作家の古井由吉に，日本語を書くということは「日本人にとっても日本語が外国語になったかのように書くということだ」と言い，「まさにそのとおりだ」という返答をもらったエピソードを語っていたりもする[6]．

このように思考を深めていくと，母語と非母語は，実は連続していて，それらを峻別すること自体が虚しく思えてくる．先述の通り，そもそもありとあらゆる言語が我々の母語になりうる可能性があったわけで，母語以外の世界中のすべての言語が〈潜在的母語〉である．

さらに言えば，〈出自〉や〈移動〉などによって幼き頃から多言語に曝されてきた者たちにとって，母語とは，国家名や民族名が付された「なんとか語」ではなく，複数の相互浸透的なことばたちから構成される，容易に名づけえぬ存在である．例えば，温又柔の小説『真ん中の子どもたち』の「こうした子どもたちの「母語」は複数の言語から成っていると思う」という箇所は注目に価する[7]．「こうした子どもたち」というのは，台湾における「台湾出身者と外国籍所有者の間にうまれた」ダブルの子たち＝〈新台湾之子〉のことであり，彼女ら，彼らにとっての母語とは，単一の言語から構成される均質なものでは決してないのである[8]．

〈多言語社会〉，〈多言語状況〉などと呼ばれるような空間に生きる人々にとっても，「母語はこれ」と指目しえないケースは多い．ひとりの人間が複数の言語を使いながら生活している場合，母語をひとつに確定するのは困難なことがある．例えば，ネパールのカトマンズにおいては，ウルドゥー語を話す仕立屋に服の仕立てを頼むとき，マイティーリー語を話す使用人に用事を言いつけるとき，ネワール語を話す店主の店で買物をするとき，英語を話す顧客に対応するとき，日本語しかできない観光客の相手をするとき，銀行でネパール語で用を足すとき，チベットから来た隣人と話すとき…といったように，相手や場面などによって言語を切り替えるという[9]．〈多言語状況〉というのはそういうものである．家庭ではA語，学校ではB語で育ち，仕事ではC語を用いる．よって，ままごとのことばや台所用品，料理に関する語彙はA語が一番

---

[6] 講演録「映画『異境の中の故郷』をめぐって」(ゲスト：大川景子，温又柔，管啓次郎，リービ英雄．司会：笠間直穂子)，『國學院雑誌』117-6, p.68, 2016年．

[7] 温又柔(2017:152)参照．なお，『真ん中の子どもたち』というタイトルは示唆的である．最初にこのタイトルを聞いたとき，筆者は写真家のジェイコブ・リースの言う“go-betweens”を想起した．さらに言えば，いわゆるCODAも“go-betweens”的な媒介者である．CODAをめぐっては，イギル・ボラ(2020)などを参照．また，辻野裕紀(2021ab)も参看されたい．

[8] 因みに，温又柔(2016:135)にも引用されている，ポーランドの作家オルガ・トカルチュクの『昼の家，夜の家』に出てくる「彼女のラテン語の文章には，チェコ語とドイツ語とポーランド語の単語が，修道女の焼くパンケーキのなかの干しブドウみたいにはさまっていた」という一節も，卓抜な比喩だと思う．なお，温又柔(2016)は，日本語，台湾語，中国語のあいだを幼い頃から遊弋しつつ，ことばをめぐって，実存的な形で思考し，時に煩悶し続けてきた温氏だからこそ書き得た，言語を考える者にとっては必携の書である．〈母語〉や〈国家〉など，自明なものとして処理されがちな概念を根問いし，「越境」などといった凡庸な術語に縮減されることを峻拒しているように読める．

[9] 山本真弓編著(2004:121)参照．

豊富で，学校用語や学術用語はB語，取引や交渉はC語が得意，逆に，A語で政治の話はできないし，B語やC語では台所用品の呼称が分からない，などといったことはよくある事態である．このように，〈多言語状況〉の中に生きる人々の言語能力は，歪な形で育まれていく．そういう人々にとって，母語は何語なのだろうか．容易に決定づけることはできない．そもそも「ある言語ができる」とはどういうことなのか．これも一考に価する論件である．「言語ができる」とは，極めて主観的なもので，決して価値中立的ではない．

こういった，言語をめぐるリアルなありようを綜合的に視瞻するとき，かけがえのない母語を特権化したり，憧れの非母語を特別視したりするような，頻見される言語観の空疎さが自ずと浮き彫りになってくる．筆者は，何語の母語話者であれ，「人間」として「景仰」することはあっても，一切「信仰」することはない．語学教師としては，母語と学習言語を同一水面上に布置して舫い，そのあわいを揺蕩いながら，双方を同時に「他者の言語」として学ぶ——この構えが非常に重要だと愚考する．

さらに，ここまで先験的に母語話者＝native speakerという語を用いてきたが，では，native writerなるものは果たして存在し得るのだろうか[10]．母語話者だからといって，誰もが雄弁なる話し手とは限らない．それと同様に，母語話者がその言語の優れた書き手とは限らず，むしろそうでない場合のほうが圧倒的に多いだろう．〈書く能力〉は基本的に教育＝学習によってのみ涵養され，自然に習得するということは通常あり得ない．母語話者でも，個人によって，語彙力や表現力には至大なる径庭が存在し，それは意識的な黽勉や硬質な読書体験の多寡の差などによって生じるものであろう．〈生まれつきの書き手〉など実在しない．

また，近代以前の西欧において，〈書く言語〉，エクリチュールは母語ではなかった．周知の通り，韓国語圏においても，長らく書記言語は漢字漢文であり，それは 15 世紀中葉にハングル＝訓民正音[11]が創制された後も持続する．19 世紀末までは漢字漢文が公のエクリチュールであった．つまり，〈母語でない言語で書く〉のがデフォルトであるという状況が，世界史の中においてはある意味で当然であり，現在でも，文字を持たず，話されるだけの言語があまた存在している．

斯く視圏を拡げ，〈書く〉という営為を思念してみると，母語話者の書き手と，非母語話者の書き手の差は，ますます曖昧模糊としたものとなり，シームレスな地続きのように思えてくる．

「グローバル化」だの「国際化」だの空虚なバズワードが瀰漫して久しいが，真の「国際化」とは，英語に肉迫することではなく，母語話者の倨傲さを剔抉し，〈自然的な所与〉としてではなく，〈意志的な選択〉として「日本語」を所有せんとする志高き非母語話者たちに対して，謙抑的な態度で満腔の敬意を払うところを出発点とせねばならない．リービ英雄(2001:46)は「日本近代の一世紀を支配していた「言語＝人種＝文化＝国籍」という「単一」のイデオロギーに対して，人種や国籍という条件をもっていない日本語の表現者たちが出現したという現代の事実の意義」を〈日本語の勝利〉として言祝いでいる．日本語は決して「日本人」の専有物ではない．韓国語も，爾余のあらゆる言語も，同断である[12]．そして，母語話者たちのこうし

---

[10] 「native writerなるものが果たして存在し得るか」というのは，伊藤英人先生（専修大学特任教授）との個人的なメールのやりとりの中でも問われた問いであり，ここでそれについて言及する契機となった．

[11] 念のために補足すると，「ハングル＝訓民正音」と書いたが，「訓民正音」という語は第一義的には書名であり，『朝鮮王朝実録』などではハングルを「諺文」と呼ぶのが最も一般的である．福井玲(2013, 2022)参照．

[12] なお，〈母語話者信仰〉の問題を考えるには，計画言語としての特異性を有する，エスペラントの世界を垣間

た傲慢さについての「反省」が，複数の言語間を遊弋する非母語話者たちの「言語愛」をより奥行きのあるものへと育んでいくだろう．

4.2. 教育とアカデミア：評価監視主義的教育観

次に，教育とアカデミアという観点からも〈愛なるもの〉を考えてみる．まず，スイスの法学者，哲学者のカール・ヒルティ(1973:230-231)の言辞に耳を傾けてみよう：

> 人を愛したいと思うなら，——しかも，これはすべての人間教育に肝要なことだが——さばくことをやめなくてはならない．
>
> どんな幼児や生徒，またはそのほかどんな人間でも，彼らと精神的関係に入るかぎり，あなたが彼らをさばいているかどうか，彼らは本能的に感づくものである．（中略） つまり，彼らもまたさばくのである，しかも厳しい尺度でもって．こうなるともう，信頼のきずなは切れ，憎悪と不信の隔ての壁がきずかれて，あらゆる真の教育はさまたげられる． （引用終わり．強調傍点もルビも原文のママ）

この一節は，教育一般を考える上で非常に示唆的な指摘である．そもそも他者を値踏みすることでしか人間関係を構築できないのはとてもさもしい．そのような構えでは，他者との間の皮膜は弥々肥厚し，互いに浸透不可能な存在へと化していくこと必定である．それゆえ，やや飛躍するが，例えば，厳密な成績評価には無意味さを感ずるし，学生による授業アンケートという発想の貧困さにも閉口する．学びは自己目的的な愉悦であって，勉強は愉しければよい．これに尽きる．教師に警邏され，評価の対象となった時点でもうつまらなくなる．翻って，アンケートで学生が講義を査定するというのは，そもそも烏滸がましいと個人的には考える．教育というのは，ある種の非対称的でパターナリズム（温情主義）的な足場に拠って立って実践されるのが基本公理である．少なくとも経済の語法で語りうるような，サービス業ではない．教師が操舵する講義のありように学生が容喙するのは，この公理に抵触する．こうした潮流は，やや大仰に言えば，〈大学教育の終焉〉と言ってよいだろう．勿論，教師に絶対的に服うことをよしとしているわけではなく，むしろ圧伏は悪だと考える．学生は教師のポジショントークやマンスプレイニングに付き合う必要もない．ただ，根本に学問への謙虚さと教師に対する敬意がないと，学びは奏功しない．何よりも学生自身が損をする．この教師はだめだと感じたら，即，受講や親炙を放擲すればいいだけのことである．とにかく，こうした相互監視関係の中に豊かなる教育や学び，入れ替え不可能な師弟関係は生まれようがない．客観化や公平性などといった美名のもとに推進されるシステムの全域化は，人間関係を硬直した代替可能なものにひたすら作り変えていくばかりである．勿論，現実問題として成績評価はしないわけにはいかないし，授業アンケートの実施についてもやめるべきだと言っているわけではない．その当否は措くとして，既在の「制度」をただ単に受け入れるのではなく，こうした問題も，再思する必要があるということである．

見るのがよい．周知の通り，エスペラントは，ポーランドの眼科医のザメンホフが考案した人工言語であり，母語話者がほとんどいないため，言語共同体への門扉が原理的にすべての人に向かって外へと開かれているという点で極めて魅力的である．〈母語話者信仰〉とは無縁で，非母語話者全員に，「外部」から眺めるのではなく，「内部」へと入ることが認められている．

筆者は，教育現場における「監視」「管理」「干渉」「強制」「課題」を 5K と称呼し，学生の内発的で豊かな学びを阻害し，教職員の BSJ＝ブルシット・ジョブ（デヴィッド・グレーバー）を増やす要因として，以前から疾視してきた．教育の過剰なシステム化と BSJ を大量に生み出し，業界全体の疲弊と劣化を齎したのは，おそらく学問／大学の大衆化だろうが，いずれにせよ，こうした 5K が，学びへの愛，言語への愛を萎えさせているのは著明だと考える．

ついでに言えば，業績主義が浸潤したアカデミアも，「学問愛」にとっては有害だろう．研究者の査定にあって，いわば尤度（ゆうど）主義的に生産性へ着眼するのも重要だが，論文の数量ばかりを秤量することは，研究者の力能を評価する上であまり意味がないと筆者は愚考する[13]．論文とは，「習慣」のように漫然と惰性で書くものではなく，〈どうしても皆に何かを伝えたい〉という構文によって言明される，結紮（けっさつ）しきれない，内発的にして具体的な情意が勃然として湧出してきたときにこそ書くべきものではないのか．写真家のハービー・山口(2017:45)は，良い写真とは「打算なく，ただ撮りたいという衝動にかられて撮った写真」だと書いているが，研究論文についても同断である．研究費関連の申請書類を書いていて，しばしば鬱悒になるのは，「打算なく，ただ研究したい」という，最も根本的で強力な原発性の動因は敢えて遮蔽して，表層的で二次的な有用性を過剰ぎみにアピールせねばならないことに心がついていかないからであろう．

研究は自己顕示欲や承認欲求を充足させるための手段ではない．宛先が誰に対しても開かれていて，その根柢に静謐なる〈祈（の）み〉が自ずと触知されるような論文こそが読むに価する．

フランスの社会思想家 P・ヴィリリオの用語に，〈ドロモロジー〉(dromologie)という概念がある．端的に言って，「〈今ここ〉ではない〈いつかどこか〉の前方へ競わせ走らせ，追いたてる原理」のことである[14]．ドロモロジーとはまさに現代社会を駆動させている根本構造＝超越論的制約であり，学問の世界も無縁ではない．しかし，少なくとも人文学は，立ち止まらないと成立し得ない学問である．ドロモロジーに同期してしまったら，底の浅い研究しかできないだろう．こうしたドロモロジー的な思考に毒された教師による，評価監視主義的教育観に基づいた言語教育も，また言語への愛を深く傷つける．

5. おわりに：ことばに守られる——〈お守りのことば〉と〈呪いのことば〉

最後に，〈愛の言語論〉と非常に親和性の高い，しかしながら，閑却されやすい，言語の重要な職能について，簡単に触れ，擱筆することにする．

ことばには〈お守りのことば〉と〈呪いのことば〉がある．そして，〈お守りのことば〉をひとつでも多く心に秘めていれば，人は必ずやタフになれる．筆者は予てからそう信じてきた．〈お守りのことば〉は，常に我々を

---

[13] ミュラー，ジェリー・Z(2019:81)は，次のように述べている：「教職員個人または学部全体が書籍であれ論文であれ，出版物への掲載数で判断されるようになると，より良い出版物よりも，より多くの出版物を出そうというインセンティブが生まれる．本当に価値のある書籍は，調査して執筆するのに何年もかかるかもしれない．だがインセンティブ制度が成果物の数とスピードに対して報酬を与えるものになると，結果として本当に重要な研究が減少することになりかねない．これこそまさに，イギリスの研究評価制度で起きたことだ．たいして面白くもなく，誰も読まない論文が大量に発表されたのだ．それに，この問題は人文学だけにとどまる話ではない．科学の世界でも，測定実績だけに基づく評価は長期的な研究能力よりも，短期的な論文発表を優遇しがちになっている」（引用終わり．強調傍点省略）　我が意を得たりである．

[14] 詳細は古東哲明(2011)を参照のこと．

優しく慰藉し，力強く援護してくれる．だから，教師はなるべく学生を褒めねばならない．

反対に，〈呪いのことば〉はトラウマのように，我々の自尊心を執拗に損傷させ続ける．子どもの頃に誰かに言われた一言が呪縛となって内攻し，「転移」的に第三者に対して訳もなく陰性感情を抱くこともあるだろう．いわゆるコンプレックスも多くは他者から投げつけられた〈呪いのことば〉にその根がある．

「自分らしさ」などという，手垢のついたイメージ像も，その実，〈呪いのことば〉が淵源である．〈呪いのことば〉には徹底して抗わねばならない．「自分らしさ」だと牧歌的に自他が信じているようなものをひとつひとつ壊していくところにこそ成長の契機が宿っている．そもそも「自分らしさ」は個々の行動の履歴から後方視的に帰納的な形で考量されるほかなく，ア・プリオリではない．この意味において，「あなたらしさ」の賞賛は，実はその人の成長の貴重な機会を無意識裡に剥奪している．人間は首尾一貫している必要など全くない[15]．

ルーマニア出身の映像人類学者イリナ・グリゴレ(2022:124)は，次のように述べている：「『雪国』を読んだ時「これだ」と思った．私がしゃべりたい言葉はこれだ．何か，何千年も探していたものを見つけた気がする．自分の身体に合う言葉を．（中略） きっと新しい言葉を覚えたら身体が強くなる．日本語は，私の免疫を高めるための言語なのだ」——そう，我々はことばに守られている．これもまたある種の愛であって，まだ十全には切り開かれていない断面へと繋がる新たな言語論的思惟の回路である．

ソウルより一時間早く日が落ちる時差のない街まぶしい夕焼け

——カン・ハンナ『歌集　まだまだです』

●主要参考文献[16]

安達茉莉子(2022)『世界に放りこまれた』，東京：ignition gallery.

イギル・ボラ(2021)『きらめく拍手の音：手で話す人々とともに生きる』，矢澤浩子訳，東京：リトルモア.

石川善樹・吉田尚記(2022)『むかしむかし あるところにウェルビーイングがありました：日本文化から読み解く幸せのカタチ』，東京：KADOKAWA.

内田樹(2005)『先生はえらい』，東京：筑摩書房.

温又柔(2016)『台湾生まれ　日本語育ち』，東京：白水社.

温又柔(2017)『真ん中の子どもたち』，東京：集英社.

カン・ハンナ(2019)『歌集　まだまだです』，東京：角川書店.

グカ・ハン×辻野裕紀(2022)「《対談》 フランス語のほうへ／から：母語として存在しない〈物語〉をめぐるダイアローグ」，森平雅彦・辻野裕紀・波潟剛・元兼正浩編『日韓の交流と共生：多様性の過去・現在・未来』，福岡：九州大学出版会.

---

[15] 話が著しく逸れるが，自他に首尾一貫性を求めないことは，ウェルビーイング的な観点からも重要だと言える．石川善樹・吉田尚記(2022)などを参照．

[16] 刊行年について，翻訳書や文庫版は，原著ではなく，翻訳書や文庫版が出版された年を記している点に留意されたい．

グリゴレ, イリナ(2022)『優しい地獄』, 東京:亜紀書房.
古東哲明(2011)『瞬間を生きる哲学:〈今ここ〉に佇む技法』, 東京:筑摩書房.
コンデ, マリーズ(2001)『越境するクレオール:マリーズ・コンデ講演集』, 三浦信孝編訳, 東京:岩波書店.
サピア, エドワード(1998)『言語:ことばの研究序説』, 安藤貞雄訳, 東京:岩波書店.
管啓次郎(2005)『オムニフォン:〈世界の響き〉の詩学』, 東京:岩波書店.
鈴木孝夫(1975)『閉された言語・日本語の世界』, 東京:新潮社.
田中克彦(1981)『ことばと国家』, 東京:岩波書店.
多和田葉子(2003)『エクソフォニー:母語の外へ出る旅』, 東京:岩波書店.
辻野裕紀(2010)「〈他者の言語〉を〈自己表現言語〉として引き受けるということ:〈跨境的な生〉の実践をめざして」, 『日本語教育研究』19, ソウル:韓国日語教育学会.
辻野裕紀(2016)「言語教育に伏流する原理論的問題:功利性を超えて」, 『言語文化論究』37, 福岡:九州大学大学院言語文化研究院.
辻野裕紀(2017)「豊かなる学びの地平へ」, 『外国語のすゝめ』(2017 年度), 福岡:九州大学大学院言語文化研究院.
辻野裕紀(2020)「〈境界〉に佇立すること, 〈境界〉画定を峻拒すること:複数の言語を生きるために」, 辻野裕紀・大津隆広・田中俊也編『連続講義「ことばの科学」2016-2018』, 福岡:九州大学大学院言語文化研究院.
辻野裕紀(2021a)「映画／本『きらめく拍手の音』をめぐる断想」, 『「東アジアにおける人の国際的移動:日韓の交流と共生, および多様性の追求」報告書』, 福岡:九州大学韓国研究センター.
辻野裕紀(2021b)「本の紹介:『きらめく拍手の音:手で話す人々とともに生きる』」, 『韓国朝鮮の文化と社会』20, 韓国・朝鮮文化研究会編, 東京:風響社.
辻野裕紀(2021c)『形と形が出合うとき:現代韓国語の形態音韻論的研究』, 福岡:九州大学出版会.
苫野一徳(2019)『愛』, 東京:講談社.
永井玲衣(2021)『水中の哲学者たち』, 東京:晶文社.
野間秀樹(2018)『言語存在論』, 東京:東京大学出版会.
ハービー・山口(2017)『良い写真とは？:撮る人が心に刻む 108 のことば』, 東京:スペースシャワーブックス.
バタイユ, ジョルジュ(2004)『エロティシズム』, 酒井健訳, 東京:筑摩書房.
ヒルティ(1973)『眠られぬ夜のために 第二部』, 草間平作・大和邦太郎訳, 東京:岩波書店.
フィッシャー, マーク(2018)『資本主義リアリズム:「この道しかない」のか？』, ブロイ, セバスチャン・河南瑠莉訳, 東京:堀之内出版.
福井玲(2013)『韓国語音韻史の探究』, 東京:三省堂.
福井玲(2022)「「訓民正音」の意味をめぐって」, 第 273 回朝鮮語研究会発表論文.
細見和之(1999)『アイデンティティ／他者性』, 東京:岩波書店.
ミュラー, ジェリー・Z(2019)『測りすぎ:なぜパフォーマンス評価は失敗するのか？』, 松本裕訳, 東京:みすず書房.

山本真弓編著，臼井裕之・木村護郎クリストフ著(2004)『言語的近代を超えて：〈多言語状況〉を生きるために』，東京：明石書店.
ラヒリ，ジュンパ(2015)『べつの言葉で』，中嶋浩郎訳，東京：新潮社.
リービ英雄(2001)『日本語を書く部屋』，東京：岩波書店.
Mizubayashi, Akira(2011) *Une langue venue d'ailleurs*, Paris：Gallimard.

【附記】本稿は，対照言語学研究会第3回例会（2022年9月9日，於明星大学）での発表論文「〈愛の言語論〉序説」に若干の加筆修正を施したものである.